

50代からの地方移住

経済スパイ天国日本

Wedge

Guiding Japan
forward

ウェッジ

NOVEMBER 2015

Vol.27 No.11

FREE

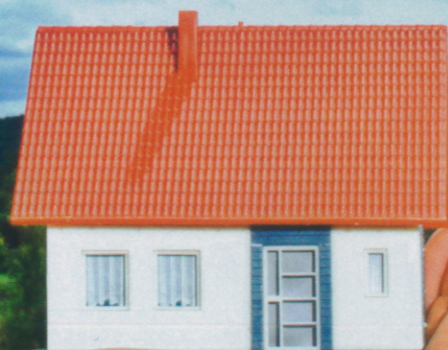
ご自由に
お持ち帰りください

11

Special Report

地方移住

「住めば都」のウソホント



Wedge Opinion

孤軍奮闘の新日鉄
スパイ対策はまだ甘い

Wedge Report

売上1000億で3兆円買収提案
中国共産党が狙う
日米の虎の子技術

Wedge Report

子宮頸がんワクチン
再開できぬ日本の病巣
非科学的な政策決定

い

いずれもこの年齢の少女
たちによく見られる症
例ですね」

ある冊子に記載され

た患者たちの症状や経過だけを見た場
合、どういう考えを持つかという質問
に対し、複数の小児科医・神経内科医・
精神科医から寄せられた回答である。
ひとつひとつの症例についてコメント
や解説をつけてくれた医師もいた。

この冊子は全国子宮頸がんワクチン
被害者連絡会・薬害対策弁護士連絡会・
薬害オンブズバースン会議の3団体が
昨年5月末に出版した「子宮頸がんワ
クチン副反応被害報告集」。弁護士が
被害者、本人およびその保護者に聴
取した内容を記したものだ。

今年に入ってから、被害者、に関す
るいくつかの書籍も出版されている。
被害者、の少女たちの症状は実に多
彩だが、特に神経疾患を思わせる症状
についての記述はどれも強烈だ。繰り
返し起きる手足や全身のけいれん、「自
分の意志とは無関係に起きる」という
不随意運動、歩けない、階段が登れな
い、時計が読めない、計算ができない、
そして、ついには母親の名前すら分か
らなくなった……。

いずれも「ワクチンのせいだ」と思
って読めば、読者は絶句し、ワクチン
への恐怖心を募らせるに違いない。

しかも、被害者、はなぜか「元氣
でやりたいことのたくさんあった、学
校でもリーダー的役割を担っていた少
女」ばかり。部活の部長、副部長、キ
ャプテン、副キャプテン、生徒会長、
コンクールで優勝した……。

去る9月17日、専門家らによる厚生
労働省のワクチン副反応検討部会が行
われた。子宮頸がんワクチンについて
議論したのは1年2カ月ぶり。部会は
今回も「ワクチンによる重篤な副反応
の多くは心的なものが引き起こす身体
の症状」との見解は覆さなかったが、
「積極的な接種勧奨の差し控え」とい
う奇妙な日本語の判断も継続するとし
た。差し控えにより接種率はかつての
7割から数%にまで落ち込んでいる。

口に出せなくなった 大多数の医師たちの考え

回答を寄せてくれた医師の中には、
子宮頸がんワクチン接種後の少女たち
を診察した経験のある医師もいた。
児童精神の専門医は「精神科」と
聞くだけで強い拒絶や怒りの反応を示

WEDGE REPORT

エビデンス無視で作り出される薬害、

子宮頸がんワクチン再開できず 日本が世界に広げる薬害騒動

世界からも懸念が示されている日本の子宮頸がんワクチン騒動。その内容はあまりに非科学的だ。
専門家も記者も政治家も、ワクチンのせいにする方がリスクはなく、世間も正義の味方と見てくれる。

文・村中璃子 Riko Muranaka、Wedge編集部

す子もいるので、神経内科の先生の方
ですつと診てもらおうともあります」
と言った。神経内科医は「辛いのは症
状を抱えた子供たち。ワクチンのせい
であつてもなくても良くなればいいで
しょう？」と応じた。いずれも報告書
や書籍に登場する、ふんぞり返って「気
のせい」「演技では」「詐病だ」と断じ
る傲慢な医師たちの印象とは程遠い。

多くの小児科医や精神科医によれ
ば、子宮頸がんワクチンが導入される
前からこの年齢のこういう症状の子供
たちはいくらでも診ていた。しかし、
今ではもう何でもワクチンのせいとい
うことになっていて、大多数のまっつ
うな医者普通の判断を言うことがま
るで「弱者への暴力」であるかのよう
な雰囲気になっている。

テレビでも繰り返し放送されたあの
激しいけいれん症状。手足をばたつか
せて立ち上がることもできなくなった
苦悶状の表情をした少女たち。ワクチ
ンのせいではないとすれば、いったい少
女たちは何に苦しめられ、何に苦しん
でいるのだろうか。

ある病院を訪れたのは子宮頸がんワ
クチン接種後、「毎日午後3時になる
と必ずけいれんを起こすようになって
た」という少女とその母親だった。脳
波、CT、MRI、採血と一通りの検
査を実施したが異常は見つからない。
「異常はないようですが発作の状態を
確認しましょう」。3時になると言っ
ていたとおり発作は起きたが、やはり
脳波には異常がない。「では、入院し
て検査しながらもう少し様子を見まし
ょうか」。入院させたのは、時計がな
くビデオカメラのついた病室だった。
午後3時のけいれんは「ピタッと止ま
った」。

「症状が少しおさまったようでよかつ
たですね」

医師はこれが脳や神経の病気ではな
く、心因性のものであることを伝えた。
ところが、母親は喜ぶどころか顔色を
変えて言った。「これだけのけいれん
があるのに、また心の問題に過ぎない
って言うんですか？ この子に何の問
題があるって言うんです！」。

少女の症状を説明するのも母親なら
医師の説明に感じるのも母親だ。中学
生や高校生と言えは自分の症状を説明
するには十分な年齢だが、ワクチンの
せいだと疑って受診する母娘では母親
が前面に出てくるケースが多い。

「偽発作 (Pseudo seizure) というん

思春期に打つワクチンであることが事態をややこしくしている

JACK WILD / GETTY IMAGES

ですが、心の葛藤やストレスが引き金となつて手足をばたつかせたり全身をくねらせたりと、けいれんのような動きを見せる患者さんがいます。私が勤めていた頃も、けいれんは伝染する。と言いましたよ。決して詐病というわけではないのですが、一人がけいれんすると同じ部屋の子供は真似して皆似たような動きをする。隣の部屋でも同じことが起きて、部屋ごとに別々のけいれんが流行するんです。ワクチン導入以前に、神経疾患や重症の心身障害の患者が全国から集まる専門病院に勤務していた小児科医は言った。

元々たくさんいたハイジの「クララ」

こうした症状が、大人にとってトラブルの少ないいわゆる「いい子」に多く見られるのは、決して不思議なことではない。背景には「過剰適応」と呼ばれる精神状態がある。期待に応えないという思いや認められたいという思いが強く、自分の欲求や不満を適切に言葉で表現することが出来ない少女たちは自覚のあるなしかかわらず、身体でそれを表現することもあるのだ。「メディアで騒いでいる症例の多く

り、2010年になってやっと論文は撤回。捏造データを世間が信じたのは、自閉症の子供が数多くいることが世間に認識されていなかったからである。

子宮頸がんワクチンは「思春期の少女だけ」に接種されることになった初めでのワクチンだ。「ワクチンによって患者が生まれた」のではなく「ワクチンによって、思春期の少女にも」と多い病気の存在が顕在化した。そう考えるようになってしまった。その理由はどこにあるのだろうか。

悪魔の証明に乗っかって「被害者」と共存する「専門家」

「責任病巣は脳の中樞神経。原因は基本的ににはアジュバントしか考えられない。これが強ければ、脳血管閉塞を津波のようにブワツと越えていくわけです。脳内に存在するミクログリアが活性化して、免疫のシステムが全部狂っちゃうわけです」

一般社団法人・日本線維筋痛症学会の西岡久寿樹理事長（東京医科大学医学総合研究所）は「子宮頸がんワクチン

は、いわゆる、クララ病。「アルプスの少女ハイジ」にクララという車椅子に乗った綺麗な女の子が出てきますよね。病気だから学校には行かれないが、お金持ちだから家庭教師が勉強をみている。親は仕事が忙しく不在で、学校に行っていないから友達もいない。恵まれているように見えるのに孤独です。それがハイジに出会って立てるようになる。「うちの子は何の問題もない」と言ってくる親もいますが、思春期に問題も悩みもない子供なんていたらそっちの方がおかしいでしょ」。ある医大の小児科教授は溜息をつく。

「これだけマスコミが騒げば、ワクチンはいきつかけになります。親への不満を直接ぶつけられなくとも、他者に矛先が向かうのであれば本人も安全です。でも、本人にもご家族にも表だってそうとは言えませんよ……」

前出の小児科精神科医はこう語り、「1歳くらいの言葉のうまく喋れない小さな子供もやりますよ。たとえば、足をつっぱらせて変な姿勢を取るとママが来てくれると分かったら、子供はそれを何度も繰り返す。病気の後にそうなる

関連神経免疫異常症候群（HANS）の発生機序をこう説明する。

昨年9月に長野で行われた線維筋痛症学会の、子宮頸がんワクチン、セツシヨンの会場に、医師の姿はまばらだった。大半を占めるのはメディアと被害者連絡会の関係者たち。西岡氏の説明に頷く記者や涙ぐむ被害者連合会の関係者らしき人たちもいる。しかし、ここから医学的なディスカッションが生じる気配はない。

HANSは14年から西岡氏が提唱している概念で、子宮頸がんワクチンを接種した人に起きたと、考えられる。免疫異常。痛みや疲労感、神経・精神症状、月経異常や自律神経障害、髄液異常などありとあらゆる症状を引き起こしており、今の検査技術では証明できないが脳内で起きている異常としか考えられない。病態だという。

すなわち、HANSという「免疫異常」の存在も仮説なら、その機序も仮説。実体のあるものが何もないのだ。世界の医学界が科学的エビデンスに基づく医療を原則とする中、この議論を鵜呑みにする専門家は少ない。しかも、HANSの定義は「接種から経過した時間は問わない」とされ、

Early report
Ileal-lymphoid-nodular hyperplasia, non-specific colitis, and pervasive developmental disorder in children
A J Wakefield, B F Murch, A Anthony, J Linnell, D M Casson, M Malik, M Bhandari, A P Dixon, M A Thomson, J Harvey, A Alexander, J E Collins, J A Wakefield

することも多い。下に兄弟が生まれたときに赤ちゃん返りなんかもそれですね。幼児期であれ思春期であれ、その困った感に辛抱強く付き合うのも医者の仕事です」と続けた。「ワクチンを打った後、階段が登れなくなった子というのもよく出てきますが、そういう子と立ち話している時に、ポンツと肩を押してみます。するとその子が倒れて転落するということはありません。10代の女の子の反射神経は私よりずっといいから当たり前ですよ」

接種後3年以上も経って症状が出てきた患者なども含めるのでさらに戸惑う。極端なことを言えば10代でワクチンを打った少女が60代で自律神経障害を来した場合、それもHANSということになってしまふからだ。

今年の線維筋痛症学会でも、「HANSは脳の異常」とし、「ワクチンのせいだ」とする西岡氏らのアジテートは相変わらずだった。「HANSは脳症であり、その4大症状は中枢神経由来である」（西岡氏）。「高次脳機能障害もある」（西岡氏、横田俊平・元日本小児科学会会長、池田修一・信州大学医学部脳神経内科リウマチ膠原病内科教授ら）。「心身反応だという人がいたら、その人はそこで思考停止していると思う」（横田氏）。「大脳辺縁系の異常」

「視床下部の異常でしか説明できない」「画像検査などにはあくまでも補助的な意味しかないという立場にいます」「一番の問題は認知機能の低下」「人類が経験してきた視床下部の症候とはちよつと違う」（帝京大学医学部附属溝口病院神経内科の黒岩義之氏）。これらの仮説を主張する根拠は、科学的エビデンスではなく、豊富だという臨床経験だ。「長年難病に携わって

る病気の患者が世間の認識以上に存在することが知られるきっかけとなった事例が過去にもある。ワクチン史上最大のスキヤンダル、MMR（はしか・おたふくかぜ・風疹）ワクチンと自閉症だ。1998年、英国の医師が一流科学誌「ランセット」にMMRワクチンと自閉症との因果関係を示す論文を発表した。

接種差し控えや国やメーカーを相手取った訴訟も起こされ、巨額の費用を投じて追跡調査を行ったが因果関係は認められなかった。結局、論文のデータを医師が捏造していたことがわかって、こんな子供たちに出会ったことがない」（西岡氏）、「私は一人の臨床医として話をします」「長年小児科医をしているが、朝から頭痛が続くという子供を診たことがない」（横田氏）。

学会なのに有意なデータは提出されず、脳機能の説明とそれに基づく仮説だけが語られることに、医師である筆者も驚く。これでは専門家が議論するための会合ではなく、一般向けシンポジウムだ。去年も今年も開かれたが、学会でわざわざメディア向けセッションが設けられるのも珍しい。

「患者さんたちは本当に気の毒だと思えます。けれど、ワクチンを打った後に起きたというだけで脈絡のない症状すべてをひっくり返るめて一つの病気、しかも、エビデンスはないけどワクチンのせいだと言われたら、黙っているしかないですよ。ないことを証明する『悪魔の証明』はできませんからね。横田先生は悪い人ではないのでしようが、かなり迷惑しています」小児科学会理事のある医師は言った。「そんなに危ないというのなら、小児科学会や理事会に来てお話ししてくださいと何度も言ってるんですが、絶対に来ません。一般人やマスコミは納得

データ捏造が発覚したMMRワクチンと自閉症の論文。執筆した英国人医師は医師免許を剥奪された。Retracted（撤回）の刻印が押されている。

させられても、同僚の小児科専門医たちを納得させる自信がないからでしょう。横田先生の医局の人たちも恥ずかしいとか言っていますよ。マスコミはそれなりの肩書の方が自信をもって言えば、言われたとおりに書いてしまいませんか」

かつての横田氏は、小児科学会の会長としてヒブワクチン承認を推進するなどワクチン推進の立場にいたが、西岡氏と子宮頸がんワクチンに出会ってからは反対派に転向した。筆者が「先生はなぜ小児科学会など多量と多くの専門家が集まる学会でお話しされないのですか」と尋ねると「小児科学会、あれは日本最大のワクチン利益団体だからね」と答えた。

現在、厚労省は子宮頸がんワクチン接種にまつわる診療相談体制として全国70の協力医療機関を指定しているが、その一つ、横浜市立大学附属病院を訪れている患者は現在61人。横田氏は大学を離れた身だが一人で全員を診ているという。「小児科は子供ではなく母親の相手」と言われることもあるように、小児科医である横田氏の物腰は柔らかく、わかりやすい話をするのも上手い。「優しいお医者さん」とい

が悪化するケースも多い。そんな少女たちにはどんな精神科医よりも「ワクチンによる脳神経障害」だと断じ、一緒に戦ってくれる医師たちが「いい先生」なのだろう。そして、彼らに訴える少女たちもまた「新しい病気を見つけた」と主張したい医師たちにとって、欠かせない存在なのかもしれない。

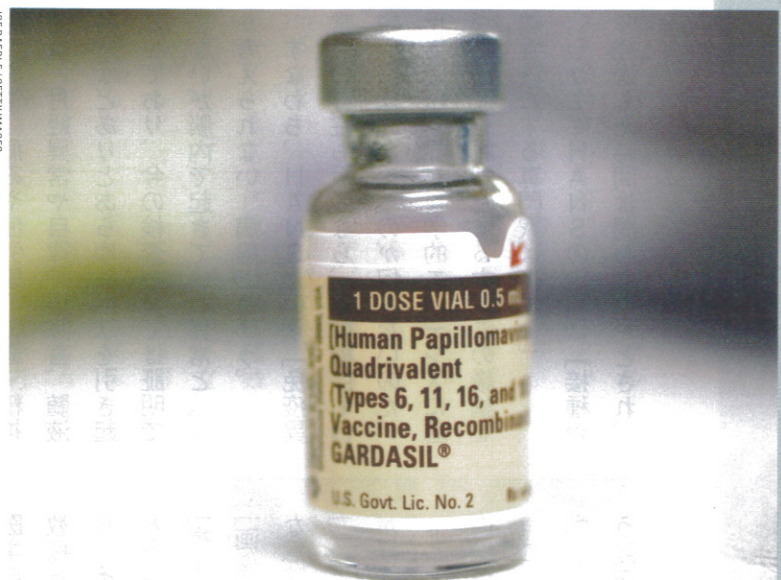
▼
**ワクチンがあれば必ず現れる
宗教・サプリ・民間療法**

「16歳という処方箋を書く61歳の間違いないかかって薬局から電話がかかってくるがあります」

処方箋に記載された薬の名前はメマリ。昨年の線維筋痛症学会で衝撃を受けたのは、「十分な治療が行われておらず危険なワクチン」との主張を繰り返している西岡氏らが、10代の少女たちにメマリやアリセプトなど高齢者の認知症治療に用いられる薬を多用しているを知った時だ。

メディアや被害者連絡会関係者を交えたセッションでは、これらの薬を少女へ保険適応するよう強く訴える意見も上がった。自費診療では負担が大きすぎるといふ。

治療に合格したワクチンで薬害が起



2006年、人類史上初の「がんを防ぐワクチン」が生まれた

った印象で、患者家族や記者にも大変な人気が。

一般の人は学会の理事長や会長、有名医大の教授などと聞けば、彼らの意見が学会や医局を代表する意見であるという印象を持つかもしれない。しかし、理事長選や教授選は政治の世界でもある。また、学会発表は会費を払い、資格さえあれば誰でも行えるので、学会発表しただけでは科学的信頼性があるとも言えない。研究内容が科学的に意味のあるものとして初めて認められるのは、データを積み上げ、仮説を立て

きたと訴えておきながら、思春期の患者での治療をしていない薬を用いる矛盾。なぜ、子宮頸がんワクチンは危ないが、少女たちに認知症の薬を飲ませることは安全だと思うのか。

今年の学会で「メマリ」の保険収載はうまくいきそうですか?と西岡氏に質問すると、「もうちょっとエビデンスが欲しい。効くのは間違いないから、私は収載していいと思うがね。でも、まず厚労省がHANSを病気にして認めないと。心身反応と言っているようじゃ話にならない」と返ってきた。

認知症の薬だけではない。「免疫異常」と決まったわけではないのに、静脈に大量の点滴をする、極めて作用の強いステロイド・パルス療法や免疫グロブリン療法などを選択するのはいかなるものか。報告書や書籍によれば、これらの治療の後、症状が悪化する少女もかなりいるようだ。

中にはワクチン接種後、たまたまこれらの治療法が効く別の病気を発症した少女たちもいるだろう。もちろん、ワクチンのせいで病気になる特殊なケースもあるだろう。しかし、HANSの概念はあまりにも広く、被害者の数え方には疑問が残る。

証し、査読者のいる医学雑誌にそれが受理された時である。「STAP細胞はあります」と涙ながらに主張しても、立証できなければ科学的意味がないことについては読者もよくご存じだろう。

HANSの特徴は「数多くの症状があり、それが出たり入ったりすること」。一人で100を超える症状が重複する症例もあるという。しかし、例えば、世界の精神医療のスタンダードDSM-IV(米国精神医学会発行の「精神障害の診断・統計マニュアル」第4版)に掲載されている「身体表現性障害」という精神疾患の症状も実に多彩だ。異なる部位の体の痛み、下痢・嘔吐・便秘などの消化器症状、月経不順を含む性的症状、運動麻痺・平衡障害・麻痺・脱力・けいれんなどの転換性障害、記憶障害などの解離性症状、意識喪失・幻覚などの偽神経学的症状などがあり、HANSで「中枢神経由来の症状」として挙げ

こうした、少女たちを苦しめるものの「正体不明さ」に乗りたがる大人たちは他にもいる。

例えば、昨年の線維筋痛症学会で、最前列で写真を撮るなど目立つ行動をとっていた「世界日報」の記者。統一教会の広報紙である。婚前の性交渉を否定する同教団との関係が噂される女性議員は12年、「性の乱れを助長する」としてワクチン導入に猛反対。今年8月30日には、同教団主催でワクチン接種後の患者向けに「ホメオパシー講演会」が開催された。

ステロイド・パルスならぬビタミン・パルス療法なるものを提供するクリニックも登場した。ビタミン剤を大量投与すると脳の血流が改善するのだそう、黒川祥子著「子宮頸がんワクチン、

られているものとよく重なる。

DSM-IVが出されたのは94年。06年に子宮頸がんワクチンが登場する10年以上前から、このような症状の患者がいたことをうかがわせる。

「ワクチンのせいで漢字が書けなくなってしまう」という子がよく紹介されますが、あの子はきれいなひらがなで言いたいことを全部書いていますよね。言語や文字をつかさどる脳領域の障害はあっても、漢字をつかさどる領域だけの障害が起きるといのは極めて稀です」と小児神経を専門とする医師は言う。

また、高次脳機能障害だとして論じられることの多い他の症状についてもこうコメントした。「簡単な計算もできないという症例がたくさん出てきますが、この子たちはみんな時間がかかっても全問正解しています。ワクチンを打った後に親の名前が分からなくなり「お母さんはどこ?」と親に向かって言ったなどという少女も複数出てきますが、それを『ワクチンで認知症になった』などという単純な議論で片付けてよいものか……」

しかし、ワクチン後の少女には「心因性」と言われて傷つき、怒り、症状副反応と闘う少女とその母たち(集英社)が登場する「ワクチンのせいで化学物質過敏症と電磁波過敏症になった」という少女の母親によれば「ビタミンの点滴が1回1万5千円、パルスで入院すると10万円」。少女の場合、月4回のビタミンの他に様々なサプリも飲んでるので月10万円はかかる。

その他、人気があるのは、酵素ジュースや酵素風呂、整体など。副腎を鍛える整体(1回1万円)もあり、核酸・水素サプリ(月3万円)、ミドリムシ・ビタミン、1本50000円のデトックス水にたどりついたケースもある。

そして、最近口コミで患者が殺到しているのが、喉の奥(上咽頭)を綿棒で刺激するだけで、なぜか少女たちの症状が改善したという「Bスポット療法」だ。先日行われた学会発表の演題は「内科疾患における上咽頭処置の重要性」今、またブレイクスルーの予感。Bスポットという名称も学会演題も週刊誌を彷彿させる。

ワクチンをめぐり、こうした人々が登場するのは日本に限ったことではない。医学専門誌「Vaccine」に掲載された分析によれば、反ワクチンを謳うウェブサイトには、ホメオパシーなど



だから危ないと言われる筋肉注射が海外では一般的

二番で結構。

瀧上卯内
瀧上工業前身「鍛冶定」創業者

それは、けっして二位で満足するというでもなければ、一位を目指さないというわけでもありません。

「何が何でも一番でなくちゃダメだ、と意固地になるよりも、二番で結構とする方が、案外、上手くいくものである。」

これは、私たち瀧上工業の創設者である瀧上定次郎の

父・瀧上卯内が得た人生哲学として、

いまなお当社で語り継がれる逸話です。

卯内が「鍛冶定」として鍛冶屋を開業したのが、明治28年。

以来、今日までの120年間、私たちはまじめに鐵に向き合い、

橋梁・鉄骨事業を柱に、この国を、

皆さまの暮らしを支えてまいりました。

社員一人ひとりに受け継がれた

創業当時の精神と高い技術力を、

次の未来に確かなにつなげていくために。

私たちは、これからもインフラ整備を通じて

社会に貢献していきます。

おかげさまで創業120周年。

確かな技術力で、皆さまの安心NO.1へ。



受け継ぐ技術、さらなる高みへ

定 瀧上工業株式会社
The Takigami Steel Construction Co., Ltd.

www.takigami.co.jp/



大鳴門橋
(徳島県鳴門市)

代替医療の紹介や広告、宗教的・倫理的に許されないといった言説、データや統計のない主張、などが溢れている。また、言うまでもなく医療訴訟は弁護士にとっては大きなビジネスチャンスだ。中でも薬害訴訟は国やメーカーを相手に巨額のリターンが見込まれるため、アメリカでは薬害訴訟に特化した弁護士事務所もあるほどである。

少女は大人たちの道具か 無過失補償制度の必要性

世界保健機関(WHO)の試算によれば、08年現在、世界で2500万人以上の命がワクチンにより救われている。一方でワクチンの技術は洗練され、

「病気になること」のリスクはわかりやすいが、「病気にならないこと」のベネフィットはわかりにくいからだ。

しかし、海外の主要国では、国民を「予防できる病気にさせないこと」に国や専門家が責任を持つ。だから、周到な議論の末、一度導入を決めたワクチンであれば、後から疾患との因果関係が見つかったとしても、国、企業、専門家、接種した医師などの責任は問わず、患者には予め定めた範囲で無条件の補償を行うことを約束する「無過失補償制度」がある。一方、日本では「病気にさせないこと」の責任は問われないが、「病気にさせること」の責任だけが問われる。過去にもワクチン導入時の厚

労首担当者が責任を取らされている。であれば、大声を上げて世に認められたい医師もジャーナリストも政治家も、「ワクチンは悪い」という側につき方が安心だろう。「ワクチンは薬害だ」と騒ぎ、日本の女性たちの守ることのできた命や子宮、そして彼女たちから生まれてくるはずだった命がいくつ失われても罪に問われることはない。苦しい少女の側に立っているのだから、世間も正義の味方と見るだろう。

中学生や高校生と言えは、どんな子も自分が「普通の子」であることに気づき、失望する年齢だ。受験も控えている。もちろん、心因性と言った医師を恨み、ワクチンのせいとしてくれた人に感謝することを通じて治った少女もいるだろう。しかし、「新しい病気だ」という医師、代替療法、宗教、サプリ、健康食品、そして薬害を示唆するメディアの言説により、結果として病気に向き合う機会を失った少女や、適切な治療を受けることができなくなってしまう少女たちもいる。

日本小児科学会や日本産婦人科学会には、海外の学会からワクチン接種再開に向けて努力するよう求めるレターも届いた。知人のWHO職員から、M

MRと自閉症の騒ぎが英国から世界に波及したように、HANSの騒ぎが日本から世界に波及することを懸念する厳しい言葉を投げかけられた産婦人科医もいる。

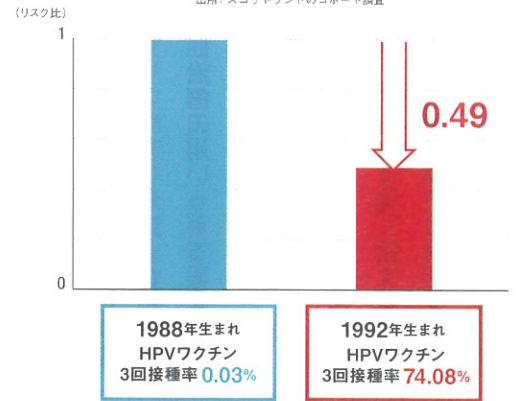
HANSはすでに日本だけの問題ではなく広がっている。しかし、「WHOは何もわかってない」と西岡氏は言う。そして、「子宮頸がんワクチンはB型肝炎ワクチンに酷似している」と言う。マクロファージ筋膜炎という病気も、当初、子宮頸がんワクチンと同様、B型肝炎ワクチンのアジュバントによる免疫異常だと言われた。しかし、WHOは99年、02年、04年と3回それを否定。現在、日本でも広く接種されている。しかし、そのことを問うと西岡氏は答えた。「因果関係がないって？少なくとも僕たちは認めてないよ」。

私たちは声の大きい人たちの声だけを聞いて騒ぎを上げ、日本だけでなく世界中の女性の「守れる命を守る」にこれほどまで無責任であってよいのだろうか。いま、改めて科学に立ち返り考えたい。

むらなか・りこ 医師・ジャーナリスト。一橋大学社会学部・大学院卒、社会学修士。その後、北海道大学医学部卒。WHOの新興・再興感染症対策チーム等を経て、現在、医療問題を中心に幅広く執筆中。

はっきりと見え始めた 子宮頸がんワクチンの実力

出所: スコットランドのコホート調査



(注) スコットランド(英国)では個人の医療データが国家レベルで一元的に管理されている。1988年生まれと1992年生まれの集団を対象に、20-21才時点の検診における子宮頸部上皮内がん(CIN3)の発生率を比較し、リスク比(RelativeRisk)を求めた。(出典) K G J Pollock, et al: British journal of Cancer (2014)

大手製薬メーカーの開発力と資本力がなければ、安全性が高い大量のワクチンを製造する環境を作れなくなっている。そのため、ワクチンの値段は高騰しているが、その分、メーカーに求められる治験も厳しさを増している。

海外でも新しいワクチンが出れば必ずそれに反対する人が出てくる。「病気になること」のリスクはわかりやすいが、「病気にならないこと」のベネフィットはわかりにくいからだ。

海外でも新しいワクチンが出れば必ずそれに反対する人が出てくる。「病気になること」のリスクはわかりやすいが、「病気にならないこと」のベネフィットはわかりにくいからだ。

海外でも新しいワクチンが出れば必ずそれに反対する人が出てくる。「病気になること」のリスクはわかりやすいが、「病気にならないこと」のベネフィットはわかりにくいからだ。

「保育」を阻む既得権

EUの理念が死んだ日

Wedge

Guiding Japan
forward

ウェッジ

MAY 2016
Vol.28 No.5
FREE
ご自由に
お持ち帰りください

5

Special Report

女はつらいよ

待機児童だけじゃない



Wedge Report

12倍の難民にすくむEU
エーゲ海に「監獄島」

強制送還の国境を歩く

Wedge Opinion

放射能とワクチン
カルト化からママを救う

ニセ科学が生み出す実害

Wedge Report

メリーズが買えない
中国ネット爆買いを追う

越境ECに群がる日本企業

2016年4月20日(毎月1回20日発売) 第28巻第5号 (JISN: 2281-0000)



放射能・ワクチンへの不安カルト化からママを救うには

福島は被ばくと子宮頸がんワクチン。弊誌が取り上げ続けてきたこの2つのテーマには、非常に近い問題が潜んでいる。福島出身の社会学者である開沼博さんと医師・ジャーナリストの村中璃子さんが、縦横無尽に語り尽くす。

編集部（以下、――） 被ばくとワクチンをめぐってどのようなことが起きているのか、実態を教えてください。

開沼博（以下、開沼） 福島の惨事に便乗する言説によって、二次被害と呼ばれる問題が明確に出てきています。

事故直後の「急性期」には、避難する過程で多くの人が命を落とし、また。放射線の危険性を過剰に煽る報道によって、農業や漁業に従事する人の中に自殺したり、将来への悲観から廃業したりする人が出ました。

しかし、状況がある程度落ち着いた「慢性期」の現在もそういった惨事便乗型言説による実害は発生し続けている。避難を続けて、心身に不調を来たして亡くなった方は2000人を超え、福島で地震・津波で亡くなった約1600人を上回っています。相馬・

南相馬で避難経験を持つ人の糖尿病が1・6倍に。福島で小さな子を育てる母親のうつ傾向が高まり、子供の肥満は一時、全国1位になってしまった。

事故直後のパニックの中で、さまざまな言説が許容される余地はある。しかし、6年目の現在、さまざまなデータが出揃った中、甲状腺がんを残し、現在も今後も内部・外部被ばくによる健康被害の可能性は極めて低いと勝負がついた。過剰避難などの過剰反応を煽り続けることは明らかに有害です。

もはや「辛いですね、不安なんですね」と情緒的な話で終わらせてはいけません。過剰反応に適切な対応を取ってこなかったことの問題を議論すべき時期が来ているのに、「放射能の被害を軽視するのか」「あの当時の過剰反応は否定できない」という、5年前の視

いいほどリバウンドするのでやっぱり治らない、治療費がかかるとなると、ワクチンをもっと憎むようになるわけですね。

ワクチン不信は医療不信につながりやすく、代替医療を探す動きも盛んです。代表例は、高濃度のビタミンCを大量に点滴するビタミンパルス療法です。これは、女優の故・川島なお美さんが最後まで舞台に立ちたいという理由で抗がん剤を拒否して選択したことでも有名になりました。推進する医師はがんにも被ばくにもワクチン副反応にも効くと言っていますが、エビデンスはなく、1クール10万円と高額です。

薬害を主張する医師たちは、子宮頸がんワクチン関連神経免疫異常症候群（HANS）という症候群を勝手に作って、ワクチンを打てばその後何年たっても副反応は発生するし、何度でも再発すると言う。意図的かは分かりませんが、ワクチンを打った子の病気は全部ハンスと主張できますから、将来にわたって患者が生まれ続けてくれる構図です。

開沼 誤った言説を信じる人の周辺には、そこから経済的、政治的に利益を得ようという人が群がっています。



CARL PENOLD/PHOTONICA/GETTY IMAGES

点にとどまった議論がまかり通るのは「被害の矮小化」です。これ以上の被害拡大を食い止めなければなりません。

村中璃子（以下、村中） 放射線もワクチンも目に見えないから不安になりやすく、誤った情報が拡散しやすいんですね。重篤な副反応があるかもしれないという疑義が生じた時点で子宮頸がんワクチンの接種推奨をいったん止めたことは良いとして、国内外で安全性に関するエビデンスが蓄積されているにもかかわらず、接種を停止し続ければ、ならなくて済む子宮頸がん患者を生むことになる。

被害を訴える少女たちに対する、適

「この食べ物を食べれば安全です」など弱い立場に置かれた人の不安につ

け込んで、金づるとして囲い込むのが典型的な手口です。例えば、有名なニセ科学のEM菌。「EM菌で除染できる、放射能を排出する」などと、それらしいデータをでっち上げる得体的に売られる。「これだ末期がんが治る」などと煽る商売と構造は同じです。

被災者につけ込む商売も多く現れました。有名どころでは「通販生活」。もはや科学的根拠や媒体としてのパラスへの配慮などなく、ひたすら不安を煽る論者を並べ立て「うちが不安なあなたの仲間ですよ」と客を囲い込む。「DAYS JAPAN」もデマを流して、地元紙にとりあげられたら逆ギレして誹謗中傷記事を出す始末。ただでさえ混乱している被災地をさらに混乱させ、被災者を傷つけ、利用して自らの商売の利益に変えようとする。二次被害も甚だしい。こういう事例は枚挙に暇がありません。

怪しげな「支援者」が集う 不安寄り添いムラ

開沼 これはトラウマを抱えた自主避

難者などの不安当事者側ではなく支援者側に責任がある問題です。支援者といっても、事態を悪化させている、かきかっこ付きの「支援者」です。NPO、法律家、自称ジャーナリスト、自称専門家など多様な主体で構成され、共通点は勉強していないことです。

言説を分析すると、放射線に関する知識をほとんど持っていない。にもかかわらず、「危ない福島」を前提にしながら、不安には寄り添わなければならない、自分たちは正義だと自己正当化する。原子力ムラならぬ、「不安寄り添いムラ」が形成されています。

これに対しデマの実害を指摘する声が強まる一方、「それでは弱者の不安に寄り添っていない、あまり批判するな、楽しくやろう」というノーテンキな反・反デマ言説がデマ温存に加担するのがこの1年の状況です。不安は絶対的に肯定されるなら、ヘイトスピーチやISも圧倒的な不安感をベースにした運動であり、肯定されてしまう。こういう悪しき相対主義は、差別、暴力を助長し、それを正す動きを阻む。それを利用して、「声をあげる専門家」らは、不安にさいなまれる弱き人を潰そうとしている人たちだ」という印象

評被害です。風評は、外国で講演すると単にrumor＝噂と訳されてしまうんですが、economic damage（経済的損害）やdiscrimination（差別）の方が正確です。前者は福島の野菜が売れないなどのよく知られた話で継続的な対応が必要ですが、問題は後者です。例えば、福島の農家が都会に直販しに行くとき客に罵倒され、漁師さんが試験操業で魚が取れました、おいしいので食べてくださいと言ったら、毒売るなどという電話が漁協に殺到する。地元NPOが子供たちと一緒に国道6号線を清掃しようとしたら、子供を傷つける殺人者などという言葉で浴びせられる。大量に届いた卑劣な誹謗中傷の送信元は反原発・反被ばく団体です。地元を復興させようとする人々の行動を全否定する動きを取るの、先ほど言ったカギカッコ付きの「支援者」です。この差別行為を不安寄り添いムラは看過するんですね。法律家や学者が入っているのに。こういうカルト的人権侵害行為に加担して福島差別主義者に成り下がっている輩には、島蘭進という宗教学者や内藤朝雄といういじめ研究者が入っています。村中 ワクチンでも、「支援者」たち

象を外野の聴衆に与え、圧力をかけて言論を潰すというのが不安寄り添いムラのやり口です。「支援者」は不安当事者となる種の共存関係をつくり、得られる限りの利得を得続けていく。村中 子宮頸がんワクチン問題でも、因果関係を十分検討せずに、症状がある少女たちはかわいそうでワクチンが危ないとする「支援者」たちが目立ちます。彼らは、ワクチンを否定しない人を見つければ、利益相反だの誰かの手先だのと攻撃を加え、「ワクチンのせいではなく、身体化」なのではないか」と言うまともな医師たちを悪者に仕立て上げます。

子宮頸がんワクチンを打った後に現れた、ありとあらゆる症状がワクチン成分による副反応だとい括りにしたのがハンスです。全身の強い痛みから、歩行困難、不随意運動と呼ばれる激しいけいれんや月経異常。さらには漢字が書けなくなった、英単語が覚えられないといった訴えをワクチンによる「高次脳機能障害」であるとし、不登校も学業不振もハンスだとする。日本政府がこうした科学的裏付けを欠く「世論」を恐れて子宮頸がんワクチンの接種を停止したままにしていること

がある種の攻撃性を帯びています。実は、ワクチン接種後の症状から治った少女も、たくさんいるんです。けいれんや歩けないなどの重い症状でも、時間をかけて、大学入学などの生活の変化とともに良くなり、もう触れないでほしい、という感じの子たちがいます。しかし彼女たちは、それを言えませんが。今となってはワクチンのせいじゃなかったかと思っても、口にすれば、ワクチンのせいと主張する「支援者」から攻撃されるからです。そうしているうちに、被害の存在が固定していくんですね。本来は疾患としてありえないハンスという疾患概念が、実体を帯びてくる。開沼 原発事故後の被ばく問題の構造と同型です。多数の日常に戻れた人と、少数のそうじゃない人がいる中、後者に「支援者」が群がり冗舌に弱者としての権力を振るう。実状を知っている人が、いくらおかしくなっていると思っても、それを口外できない。不安当事者も、個別に話を聞くと現状への違和感は口にする。ただ、その人間関係で5年間経つと、もう振り上げた拳を振り下ろせない状況に追い込まれている。周囲が説得しても聞か

に対し、WHO（世界保健機関）は昨年にも名指しの日本批判をしました。

どんな医薬品にもごく稀ですが副反応が発生します。市販の風邪薬の副反応で重篤な症状を示す人もいますから、ワクチン後に症状を訴えている少女の中にも、もちろんそういう子はいらっしゃるでしょう。しかし、副反応を検討する厚生労働省の専門家委員会も、多くは「身体化」、つまり、心がきつかけとなった身体の病気であると繰り返し結論づけています。

「身体化」は心の病気ではなく、心をきつかけとした身体の病気です。しかし、当初、多くの医師が口にした「心因性」という言葉が、心の病気、気のせいというイメージを抱かせました。そうやって傷ついた少女や母親たちには、ワクチンによる脳障害だと断じる医師たちが「いい先生」に見えてしまふ。そして、新しい病気を発見したと主張したいハンス派の医師たちにとっても、彼女たちは欠かせない存在であり、共存するわけですね。

風評から差別へ 被害が実体化し攻撃的に

開沼 その結果、悪化しているのが風

いので、多様性を認め合うと言えばきれいに聞こえますが、要は相手にされなくなる。そうなる自分たちは蔑まれているという感覚に至り、孤立化し、言説が過激になっていきます。

村中 子宮頸がんワクチンに対する過剰反応の中で、行き過ぎと思えるのが、子宮頸がんサイバーやがんで家族を失った人への攻撃です。

子宮頸がんは性感感染症なので、男遊びしてなったとか、製薬会社からカネをもらってワクチンを勧めていると言いがかりをつけられ、誰も表に出なくなると聞きます。最近の子宮頸がん予防キャンペーンは、検診は勧めるがワクチンは勧めないスタイルになりました。がんに傷つけられた人たちが、ワクチンを憎む人たちにさらに傷つけられ、声をあげられなくなっています。子宮頸がんの犠牲者は決して少なくありません。年間3000人が亡くなるだけでなく、毎年1万人以上が、前がん病変や初期で見つかったがんを取り除く、円錐切除という子宮の入り口を切り抜く手術を受けています。

この手術は比較的簡単な上、子宮を失わずに済むので、ワクチン不要論者は検診と手術で十分と言いますが、円

薬害と断じる医師が「いい先生」に見えてしまう



村中璃子 Riko Muranaka
医師・ジャーナリスト
一橋大学社会学部・大学院卒、社会学修士。北海道大学医学部卒。WHO等を経て京都大学医学研究科非常勤講師も務める。

開沼博 Hiroshi Kainuma
福島大学特任研究員
東京大学文学部卒、同大学院学際情報学府博士課程在籍。社会学者。福島大学つくしまふくしま未来支援センター所属。
NAONORI KOHIRA (4)



福島につけこむデマ記事は完全な二次被害だ

錐切除を受ければ流産しやすくなる

し、性生活や妊娠に対して消極的になるなど、表に出ない深刻な問題がたくさんあります。また、がんに一度なれば、取り切れないかも、再発するかも、という不安にも襲われ続けます。

亡くなくても生き残っても辛いがん患者に接する機会の多い産婦人科医は当然、ワクチンに好意的な立場をとりませんが、利益相反と言われ、世間から黙殺されています。ちなみに、ワクチンが普及すれば患者は減って産婦人科医の利益は減りますので、おかしな誹謗中傷ですよ。

両論併記のメディアが誤った少数意見をばらまく

——こんな悲しい事態に陥った責任はメディアにもあるのではないですか。

開沼 不安寄り添いムラは、メディアが定期供給するニセ科学言説資源を利用して生き延びていますから、それがなければここまで状況は悪化していな

かったでしょうね。

週刊誌、漫画「美味しんぼ」、報道ステーション。さまざまな媒体が、ニセ科学、デマを再生産して利益を得てきました。ムラの中で流通する言葉は社会全体から見ればごくごく少数の言説をかき集めただけ。今も週刊誌で放射線が危険と煽って食い扶持にしているライターは3人ぐらい。彼女・彼らは年間何十万円という原稿料を懐に入れてる。甲状腺がんの問題もよく話題になりますが、「福島で甲状腺がんが多発している」と論文にしている専門家は、岡山大学の津田敏秀さん以外に目立つ人はいない。その論文も出た瞬間、専門家コミュニティで完膚なきまでに叩きのめされている。

この構造を把握していない人たちが利用する「支援者」や自称科学者たち。大手メディアも、普段のクセで両論併記をして、まともな専門家と同じ分量を割くから、50対50の論争なのかと勘違いする人が出てくる。

震災後、福島から県外避難したのは何%だと思えますか？

開沼博

オーガニックやナチュラル志向で免疫は獲得できません

村中璃子

寄りがいたのにね、という人が多くてハッとさせられました。

開沼 これも全く同じです。3・11後のぼせた議論が出てきました。ばらばらだった個人をネットがつなぎ合わさせて可視化し運動体になるという議論ですが、まさにそのとおりのことが悪い方向で起きてしまいました。

SNSが「カルト」を作り「支援者」に消費される

——被ばくもワクチンもママが目立ちますね。

開沼 「ママたち、子供たちを守れ」と「弱者憑依」して水戸黄門の印籠のように掲げることで、都合の悪い議論を全て封殺して利益を得続けていくのが、不安寄り添いムラのワンパターンだけ最強の口実です。

村中 病気になる、例えば周囲に優しくしてもらえない、といった主に心的な利得が発生します。それを求めて病気になるうとすることをミュンヒハウ

村中 この前、面白いことがありまし

た。ある女性ファッション誌が、子供に子宮頸がんワクチンを打たせるか打たせないか、というような特集を組みたいと取材に来たんです。小さい子供のいる若い女性のライターさんが言うには、「ワクチンは危ないと言っている医師ばかりかと思っていたのに、村中さんの記事に出てくる人以外に探せない」と。でも「ゼロベクレル派」で有名な編集長は「両派5人ずつ探せ」と言っているらしく、ワクチン危険派を5人も探せないからどうかして欲しいって言うんです。

開沼 ノイジーマイノリティーとサイレントマジョリティーの話なんですよね。メディアは、サイレントマジョリティーを無視しようとする。自主避難し続ける人は取り上げるけれども、その何倍も存在する自主避難から戻ってきた人や残された父親の筆舌に尽くしがたい不条理は取り上げない。

拙著「はじめての福島学」では、冒

ゼン症候群というんですが、代理ミュンヒハウゼン症候群というものもあるんです。

自分の家族が病気になったことで得られる利得のことで、例えば、生活が苦しい家庭で、子供が公費で入院したので、自分も温かいベッドで寝られるといった状況を指します。これにも心的なものがある、母親が注目を浴びるといった自己実現的な利得を考慮しなくていいかどうか。子宮頸がんワクチン接種後の症状に苦しむある少女はこう言っていました。「子供同士もツイッターやLINEでつながっているけど母親同士ほど盛り上がりがない。大人たちの騒ぎに子供は引いている。子供が身体化した症状を示す場合、親もケアするのが一般的です。」

開沼 放射線でも全く同じで、因果関係を示すエビデンスがゼロどころか、実際に起こったか裏が取れない話でも「子供の体調が悪くなった」というのは通りのいいレトリックですね。子供は発言しなくていいし帯同しなくても

頭にあるクイズを紹介しています。福

島から震災後避難して県外に移った人って震災前の人口の何%だと思えますかと講演などで聞くと、たいてい20、30%などという答えが返ってくる。避難者の話をよく聞いているという関西の地方紙の記者は40%と答えました。でも、正解は2%。極端な情報ばかり流れてきた証左です。

村中 フェイスブックやツイッターといったSNSの影響も大きいですがね。社会全体で見れば自分と同じ価値観の人は少ないのに、せいぜい100人ぐらいの相互フォローのバーチャルサークルにこもれば、学校に行かれていない女の子や母親も端末をいじっているだけで、みんなから評価された気持ちになれます。

リアルなコミュニティが崩壊していることも大きい。ある地方取材に行ったら、昔ならああいう親や子供に「あんな、いい加減にしなさいよ」と言ってくれる親戚のおばさんや近所のお年

いい。自己正当化・自己防衛に極めて有用な言説資源です。母親本人は元気に毎日アクティビストとして動くことができる。子供のことを心配した選択だと言えば、責められることはない。

村中 少女たちを診ている医師は、怒っている子供を見たことがないと口を揃えます。ワクチンのせいじゃないと思うと言くと、怒るのはまず母親。中高生であれば、症状の説明は自分でできるのに、連れてきた親が全部説明して口を挟ませない。医師、治療法の選択からSNSの情報発信まで全部親がやっているケースが多い。私が出会った子たちも静かな子ばかりでした。

——そして、反ワクチンのママは、プロフィールを開くとたいがい反原発で反安保で反安倍なんですよ……。

開沼 それはこの言説を追っている人の中では完全に常識ですね。グローバな社会運動の歴史の転換点は70年代にある。それまでマルクス主義ベースの政治の問題を扱った運動が衰退する中で、公害やオイルショック、ベトナム



ム戦争などを受けてエコロジーなど生活の問題が大テーマになっていく。赤から緑への転換とも言えますが、緑のエコ運動の中には、反資本主義、反科学、反人工物などがある。思考停止してそのセット志向に従っておけば、政治的に考えた感じになれて周りとも共感しあって安心できる。

村中 いわゆるエコな人たちって、自然志向でオーガニックでゼロベクレルで免疫力アップ！ というようなことを言いますよね。そうやっていけばワクチンなんて要らないと考える。

免疫という言葉はフアジーで、すごく難しいんです。簡単に言うと、免疫には自然免疫と獲得免疫があって、自然免疫は風邪をひきにくいとかちよつとした怪我が治りやすいというようなことで、獲得免疫は特定のウイルスや細菌などをターゲットにした免疫。この2つは全く別の次元のもので、将棋で言うと歩と飛車角ぐらいの違いがあります。それをごっちゃにして、有機野菜やビタミンCを摂っていれば元氣

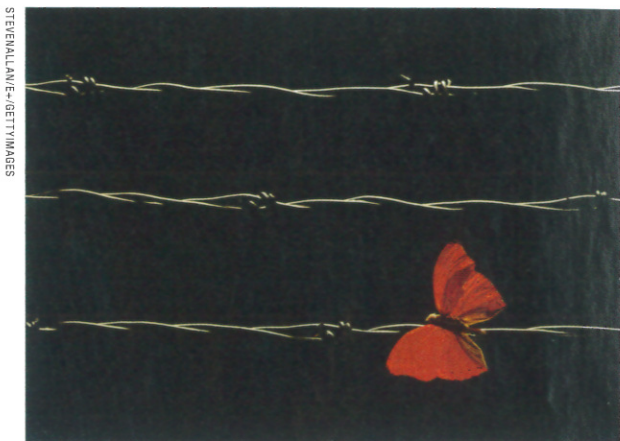
だからワクチンも抗がん剤も要らないとするのは明らか間違いです。

開沼 エコって共産主義、新興宗教よりも心理的ハードルが低いですからね。生活の中で実践できるので。そこに「メディアは報じない〇〇」というような陰謀論が吹き込まれていくと、一気に政治的な問題にも目覚める。

——ツイッターなどの「半匿名性」によって、同じようなことを言う人だけがどんどん集まり、コミュニティ内の同調圧力が高まってカルト化するという話を聞いたことがあります。

開沼 「SNSによるママのカルト化」は非常に深刻な社会問題です。自分たちに都合のいいネタを提供してくれる自称ジャーナリスト・自称専門家を追い、攻撃対象を常に探し、教祖様の講演会を開き「お布施」を払う。その全てをSNSに上げて煽る。狭いコミュニティの中で普通の人がぎよつとするような話で盛り上がりながら虚ろな「救済」を求めるという構造ですね。

社会学では「予言の自己成就」といいますが、自分で思い込んだ不幸を予言し続けることで、本当にその不幸が実現してしまう。あそこには二度と帰ってはいけないということを繰り返して



STEREOLAB/FACETT IMAGES

言ってくれる教祖様に従属すればするほど、自分の感覚・社会関係が元々住んでいた地域や仲間から切り離され、本当に帰れなくなる構造が強化されていく。自分たちは被ばくしたあの日以来体調が悪いんだと言い続けて、ゼロベクレル商法にはまって栄養の偏った食事と避難の経済負担を重ね、子どもにストレスをぶつけるから、本当に母子ともに心身の健康が悪化する。

行政とメディアの役割 解除のアナウンスを流す「場」

——ここまで膠着してしまった状況をどうすれば変えられるのでしょうか。

村中 個別の科学者同士の議論や学会の声明はもはや無力です。行政は「積

「食べ物は何歩譲るとして、ワクチン受けさせないのは虐待じゃないの？」口を開けば喧嘩になるが、妻は子供のためだと譲らない。2014年の漫画「美味しんぼ」の鼻血騒動に怒りを感じ、勉強を重ねた夫が、放射線量が下がったことを示すリンクや放射能に関する正しい理解を促す本を与えても「これ、私のじゃないから」と見ない。福島は無理でも、せめて東京で同居しようという話は何度もしたが、国は放射能汚染を隠しているといった陰謀論を吹き込む人やSNSに囲まれ、聞く耳を持たない。心配してフェイスブックの内容に意見すると、ブロックされ、投稿を読めなくなった。

「それでも避難先の人からすれば、子供を守るために避難し、頑張っているママということになるんです」。適切な医療を受けられず、父親を失ったままなのに、子供は守られていると考える矛盾。「父親が子供と一緒に居られないのは君の勉強不足じゃないのと言って、私のせいじゃない、原発のせいとなる。確かに、事故がきっかけです。でも、もう事故のせいなのかどうかも分かりません」。対話の糸口が見つからない妻との連絡が減る中、娘とは昨夏から会えていない。

自主避難したまま戻らぬナチュラル志向の妻

あなたのホテルに送ったから持ってきて」。物流も交通も麻痺した震災直後、福島に住む妻が、東京出張中だった夫に届けて欲しいと求めたのは、ホメオパシーで使う「レメディ」だった。自然治癒力に作用するという砂糖玉だ。海外の大学で教育を受けた妻は、根っからのナチュラル志向。オーガニック好きで玄米菜食を是とするマクロビオティックを実践し、原則、牛乳と肉は口にしない。思い返せば結婚前から、ヤマザキパンは危険だと食べず、コンビニのサンドイッチを買うとハムをどけていた。

電子レンジを使わず、携帯電話はイヤホンマイク、子供にはテレビも見せなかったという妻は、仕事のある夫と離れ、娘と関東へ避難。その後、原発からもっと離れようと関西に避難したが、5年たった今も戻って来ない。当時2歳だった娘はもう小学2年生だ。

子供にも自然が一番、人工的なものは良くないと、定期接種含む一切のワクチンを拒否。熱を出した時も病院でもらったシロップを与えなかった。食事は大豆肉や西日本の有機野菜を使い、給食のある小学校にも弁当を持たせている。

ワクチンとモンスターマザー

2で子宮頸がんワクチンを接種した頃から失神を繰り返し、現在では、歩行障害と光過敏で杖とサングラスを手放せないという少女がいる。しかし、周囲から聞こえてくる話はこの一文から想像される物語とは少し違っていた。

母親は、少女が小学生の頃から学校では知られた人物。「娘がいじめられている」と言っただけで、少女が副キャプテンを務めるクラブ活動の、キャプテンの少女やその親などに繰り返しクレームをつけていた。

中学に入り2年生になった時、ある事件が起きた。部活動中の体育館に突然乗り込んできた母親は葉袋を示し、他の部員が心労をかけるため娘は心の病になったと主張。部員と父母会、学校に謝罪させた。処方されていたのは偏頭痛のための鎮痛薬だった。同学年の部員は全員部活を辞めた。

地元の名門校に進学した少女は、高校では「よく失神する子」として知られるようになる。しかし、今ではワクチンのせいということになっている失神に対し、冷ややかな反応を示す同級生も多い。「最初は驚いたけど今はまたかって感じですよ」。先生の話が長い、

テストができないなど面倒な状況になると少女は失神する。失神と言っても静かなもので、突然、机にうつぶせになってから、ゴロンと受け身をとるように床に崩れ落ちる。決して怪我をすることは無い。クラスでもルーティンができていて、うつぶせになると教師の合図で周りの生徒が机や椅子をどけ、空いたスペースに倒れると担架が準備され保健室に運ばれるという。

歩行障害や光過敏も訴えるようになった少女は高2からほとんど授業に出ていないが、母親は卒業に必要な補習を受けさせることに納得しない。卒業直前の年明け、母親は突然、娘を特別支援学校に転校させた。しかし、転校のほんの数週間後、なぜか元の高校に再び転入。少女は補習を受けずに普通高校を卒業した。他の生徒や親の間では、不公平感が広がっている。

少女が置かれた環境を懸念して本人に直接取材を申し入れたが返事はなかった。プライバシーには配慮しているが、後日取材方法に抗議し記事化しないことを求める内容証明が両親の代理人から編集部へ届いた。

ワクチン被害を訴える親たちの背景には、彼らの主張からは見えない事情が存在する。

し、いまもそうです。

——過剰避難にしても積極的勧奨の差を控えにしても、状況がわからないときに、まず安全サイドに立って判断したということですよ。であれば、状況がわかってきたら判断を更新していくべきではないかと思うんですが。

開沼 その通り。そこにつきまます。専門家集団や政治・行政のあり方に問題があるのは事実ですが、世論やメディアの状況も早急に改善する必要があります。特にウェブにおいて、ノイジーマイノリティーに席巻されるのを放置せず、サイレントマジョリティーを可視化する「場」を作っていく。普通の人が、判断をするための前提知識を更新できる土壌を準備することが重要です。

村中 昨年12月、毎日新聞に東京大学の坂村健教授が「事態がわからないときに、非常ベルを鳴らすのはマスコミの立派な役割。しかし、状況が見えてきたら解除のアナウンスを同じポリシーで流すべき」と書かれていて、心から同意しました。専門家の多数が抱えている「相場観」をきちんと世に提示していく使命がメディアにはあるはずですよ。